

県北どらくろあ

第114号 2025年9月1日（毎月1日発行）



火野葦平（昭和34年12月撮影）。
「革命前後」（中央公論社）より転載

郷土の本棚⑬（文責・赤川仁洋）

「革命前後」 火野葦平著

ひのあしへい

——時代の渦に翻弄された文学者の矜持

本書は昭和35年1月30日、中央公論社から刊行された。火野葦平の死から6日経っていた。享年52歳、死因は当初、心筋梗塞と公表されたが、12年経った昭和47年、13回忌の日に、睡眠薬による自殺であったことが遺族によって明らかにされた。戦争に翻弄された人生の思いの丈を吐き出すように、自伝的小説「革命前後」を書き上げたあとで、火野葦平は燃え尽きるように命を絶ったのである。

小説の舞台は、九州・博多の川島ホテル。陸軍に接収されて、西

部軍報道部の宿舎に割り当てられている。本土決戦で真っ先に敵兵が上陸してくるであろう九州の地で、戦意高揚の報道活動のために組織された部署で、作家や映画監督、音楽家に画家と、さまざまな文化人が徴用されている。敗色濃厚の中、本音や建前が渦巻いて、魑魅魍魎が跋扈する伏魔殿の様相だ。中には九州を独立させて軍政を布き、革命政府を作って米軍を迎撃しようという動きもある。戦局はますます悪化、昭和20年8月6日広島市、同9日に長崎市に新型爆弾（原爆）が落されて焦

土となり、同15日、ポツダム宣言を受託して日本は無条件降伏する。軍国主義国家が壊滅、真の革命が起ったのである。終戦の2日後に、西部軍報道部は解散する。妻子が疎開している母の生家を、辻昌介（火野葦平の仮名）は戦後になって訪れる。一週間ほど滞在するのだが、そのときのこと

が詳しく書かれている。「正確に言えば、広島県比婆郡峯田村字峯、山陽線を広島で乗り換え、芸備線の庄原で降りる。そこからバスで約二時間、降りたところからまた二里ほど、やや登りになった細い道を歩いて入らなければならない。谷川に添って行くと、

両方の山が次第に逼って来て、どんづまりになったような山峡の口に、谷口家はある。」

「母松江（マン）が生まれ育った家である。よくもこんな草深い田舎から北九州へ出て来たものだ。元来、広島県はアメリカ移民など、県外へ出稼ぎに行く者が伝統的に多く、松江も将来はブラジルに渡って、大農場を経営する夢を抱いて、十九歳のとき、この田舎を飛び出したということであった。しかし、門司で沖仲仕をしているうち、辻安太郎（玉井金五郎）と知り合い、結婚して若松に住みついてしまったのである。」

その老母は、周囲の家々がみんな避難しても、お手伝いの娘一人

を伴って戦時中の若松の家を気丈に守り抜いた。B29から落された小型爆弾はコンクリートの塀をふっとばし、水道管を破壊したので、噴水のように水がとびだして洪水のようになった。四発の焼夷弾の直撃は三発が不発、一発が屋根を貫いて廊下

に落ちて燃え始めたのを、松江が女中を指揮しながら、濡れ簀を数枚かぶせて消しとめてしまったという。

辻昌介一家を帝釈峠に案内した和尚さんの話が、松江の剛毅な性格の由来を示唆しているように思える。

「どうも谷口家は平家の落武者の流れのようでありやす。きびしい源氏からの追討の眼を脱れて、平家の残党は日本全国

のさびしい奥地へ逃げこんだわけじゃが、この帝釈峠に

（中略）それで、谷口家の祖先も平家らしいが、ハッキリとしたことはわからん。この前、古い墓を調べとって、紋がどうもおかしいもんじゃけえ、わしはそれにちがいなアと鑑定したわけがなんす」

発行：どら書房

誌面デザイン: ROUTE183
協賛：九日市愛好会